嵯峨の景色の持続と変容に関する研究*
-明治から現代までの京都西郊の嵯峨を対象として-
A Study on Continuation and Transformation of Landscape Character of Saga Area

山口敬太**・出村嘉史***・川崎雅史****・樋口忠彦*****
By Keita YAMAGUCHI**・Yoshihumi DEMURA***・Masashi KAWASAKI****・Tadahiko HIGUCHI*****

１．はじめに

（１）研究の背景と目的

京都盆地を取り囲む三山の山裾の緩傾斜地である山辺は，平安時代以来信仰の地，別業の地，歌の地など，京の人々にとって特別な場所であり続けてきた．

このような京都近郊の山辺の景色も，明治維新以降になると鉄道などの近代交通を用いた観光開発や，戦後の高度経済成長期の開発によって大きく変容する．また，京都ではそれに対応する形で昭和初期には都市計画法による風致保存，昭和41年には「古都における歴史的風土の保存に関する特別措置法」による景観保全施策がとられることとなった．京都の山辺に集まる神社仏閣や名所・旧跡や，それらを取り巻く周囲の環境は，これらの景観保全施策と関係をもちながら，近代から現代に至るまでどのように持続もしくは変容してきただろうか．

本稿では京都西郊の山辺であり代表的な景勝地である嵯峨を対象とし，具体的な調査をもとにその景色の持続と変容の歴史的過程を明らかにしたい．さらに，当時の風致行政が十年単位の時間軸で実際の景観に対して与える影響について考察を行う．

この分析を通して嵯峨の景色の特徴を明らかにし，さらに当地域だけでなく山辺や歴史的環境を有する地域における整備指針の手がかりを示したい．

（２）研究の位置づけ

京都における都市とその郊外との関係を歴史的に捉えた研究としては，古橋信孝の論考[1)]がある．山辺でもあった郊外が京の人々にとって非常に多様な意味を持つ場所であったことをこれは指摘している．また渡辺らの研究[2)]は，京都の山辺である鳥辺野の近代の都市化による変容を論じており，これは近代の山辺の大きな変容を明らかにしているという点で興味深いが，持続した景観については述べられていない．

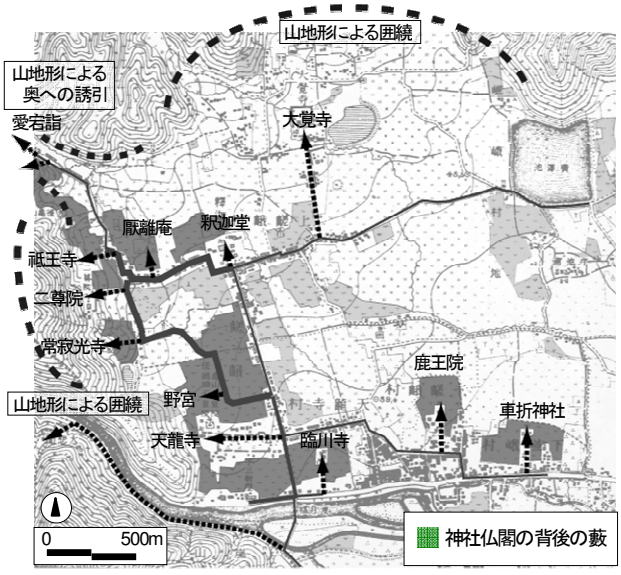
京都の山辺において，近代から現代へ至るまでの景色の変容と持続を歴史的に明らかにするという独自の視点をもつ本研究は意義があると考える．

２．神社仏閣周辺の植生がつくる景観

（１）地形と植生の景観的効果

本節では嵯峨の景色において「地」として重要となる自然景観の効果とその歴史的変遷について述べる．

嵯峨においてもとりわけ小倉山山麓と大堰川沿いに位置する神社仏閣には禅寺や浄土宗寺院が多い．**図-１**にみられるように，嵯峨の西側の小倉山・亀山，北側の山なみが作り出す地形が囲繞景観をつくっており，その地形の境目は愛宕神社への参詣道となっており，地形の構造が参詣者を奥へと誘引している．山がつくる地形だけ



図―1　神社仏閣背後の山地・藪がつくる囲繞と奥
（背景の地図は明治22年の1/20000測量地図を基に作成）

---

*キーワード：景観，空間整備・設計
**学生員，工修，京都大学大学院工学研究科
（京都府京都市左京区吉田本町，TEL075-753-5551，Keita.Yamaguchi@t23x1791.mbox.media.kyoto-u.ac.jp）
***正員，工博，京都大学大学院工学研究科
(TEL075-753-5123,demu@art.mbox.media.kyoto-u.ac.jp)
****正員，工博，京都大学大学院工学研究科
(TEL075-753-5122,kawa@art.mbox.media.kyoto-u.ac.jp)
*****正員，工博，京都大学大学院工学研究科
(TEL075-753-5121,higuchi@urban.mbox.media.kyoto-u.ac.jp)

でなく，山裾の植生を見ても江戸時代から続く街道から神社仏閣へと向かうアプローチ空間においては，森や藪などの植生が囲繞景観をつくりだしている．この植生が創りだす景観によって，宗教的な空間である「奥」へと導かれる．ここでは植生が奥への道を演出する上で非常に大きな効果をもたらしている．

寺社周辺だけに限らず，嵯峨の藪はそれ自体が景色としてみられてきた．北尾鐐之助が戦前の嵯峨について「仲國の嵯峨野は，月とか，虫とか，琴の音とか，秋草とか，詩趣に富んでゐるが，昔はこんな藪ばかりであった」[3]と書いているように叙景歌の題となり，芭蕉も去来の落柿舎を訪れた際に「嵐山藪の茂りや風の筋」，「ほととぎす大竹藪をもる月夜」と詠んだ[4]．このように藪は嵯峨の景色において詩趣を与える重要な景観要素であったことが分かる．

（2）森・藪の歴史的変遷

これらの植生はいつ・どのようにして創られたか歴史を追うと，応仁の乱以前まで遡ることができる．**図−2**は15世紀初めの嵯峨の景観を描いた応永鈞命図から当時の寺域を示した図である．百を超える天龍寺の塔頭を中心として密集した寺院群と宅地が南北約1400m，東西にも最長1km以上に渡っていた．しかし，応仁の乱の頃に寺社は悉く焼失し，嵯峨は荒野となる．田畑や牛馬の牧場の地となり，復興されずに終わる塔頭も多かったという[5]．これらの塔頭・宅地の跡地が藪（主に竹林）となり畑となり，近世を通じて明治初期までこの状態が続いた．その後，開発時期が早かった武蔵野や東山とは異なり，京と適度な距離を有していた嵯峨では開発が遅れ，明治の初期までこれらの特徴的な自然景観は保たれてきた．

図−2　15世紀初めの嵯峨
（応永鈞命図をもとに作図）

（3）田・畑の景観的効果

枕草子に「野は嵯峨野さらなり」と書かれたように嵯峨野は平安京の大宮人にとって遊猟の地，若菜を摘んで遊楽する地であった．嵯峨野が歌枕の歌には「秋」「花」「すすき」などが頻繁に登場し[6]，秋の野の景色が好まれたことがわかる．近代においても谷崎潤一郎が「廣い野原にげんげと菜の花が咲き乱れ，遠く比叡愛宕の山々が暮靄に霞んで」[7]と書くように，野は身体近くの花を眺めながら，広々とした遠景の山並みを楽しむことができる場所であった．さらに北嵯峨の田園，大沢池や広沢池の池辺とあわせて，嵯峨野はとくによい眺望が得られる場所であった．

このように森・藪がつくる囲繞と奥の景色，田・畑がつくる優れた眺望は，嵯峨の景色にとって名所の「地」としてだけでなく，「図」としても非常に重要な要素であった．さらに作家である高桑義生が指摘する[8]ように，その囲繞と眺望の景色が歩行空間上に交互にあらわれることによって，嵯峨では変化ある景色の体験が可能であったのである．

3．明治初期から現代までの土地利用の変化

（1）山の植生の遷移

嵯峨周辺の山においては，近代以降植生の遷移が進んだ．明治初期の嵐山では低いアカマツが主な植生であったが，今ではアカマツやヤマザクラはほとんどみられず，ケヤキやムクなどの落葉広葉樹が主である．北山，そして小倉山においても二尊院の裏山を除いてアカマツが主な植生であったが，現在はみられない．このように山地では植生は変化したが，その土地利用自体はあまり変化がみられなかった．

神社仏閣に関しても，明治の上地以降境内の拡大縮小はほとんどなく，土地利用もほぼ変化しなかったとみてよい．よって以下では，近代以降変化の大きかった森・藪と田・畑に着目し，地図を用いた分析によって土地利用の経年変化を追う．

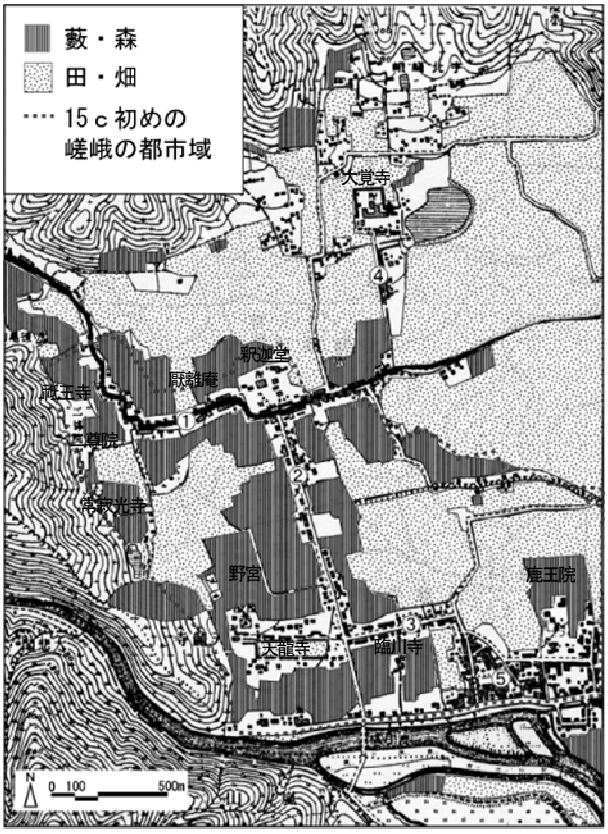
（2）明治半ば（明治27年）の土地利用

明治27年の地形図からは(**図−3**)集落を除いた土地で北東側に田畑が多く，南西側に藪地が多いことがわかる．明治30年に京都鉄道が敷設され嵯峨駅が設けられるが宅地開発はあまり行われず，集落は近世からの門前町の形態をほぼそのまま継承している．嵯峨釈迦堂から北西へと延びる愛宕街道(**図−3**の①)と釈迦堂門前町(同②)，天龍寺門前町(③)，大覚寺門前町(④)がそれである．

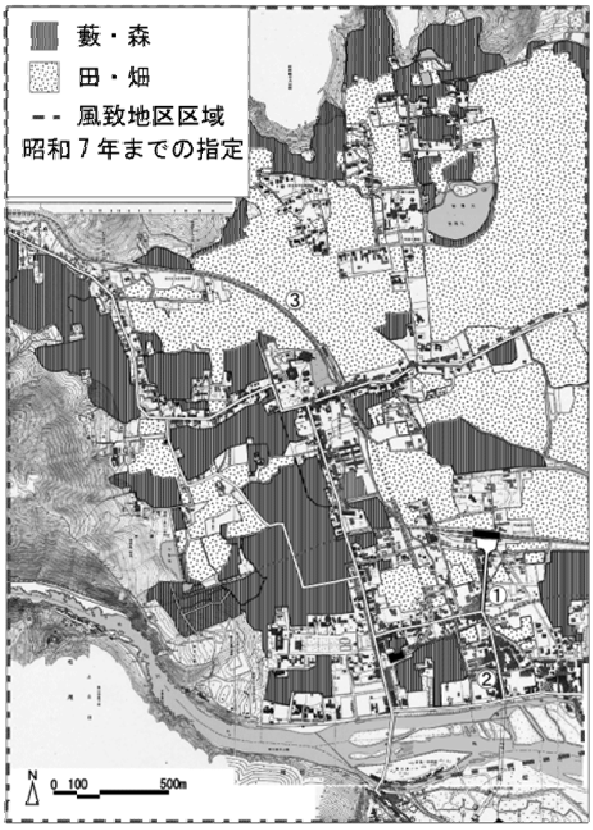
下嵯峨は桂川の水運に依存した材木輸送で栄え，大規模な筏繋留所が渡月橋下流に設置されるなど嵯峨周辺はその集積の中心となっていた(⑤)．

（3）昭和初期（昭和11年）までの変化

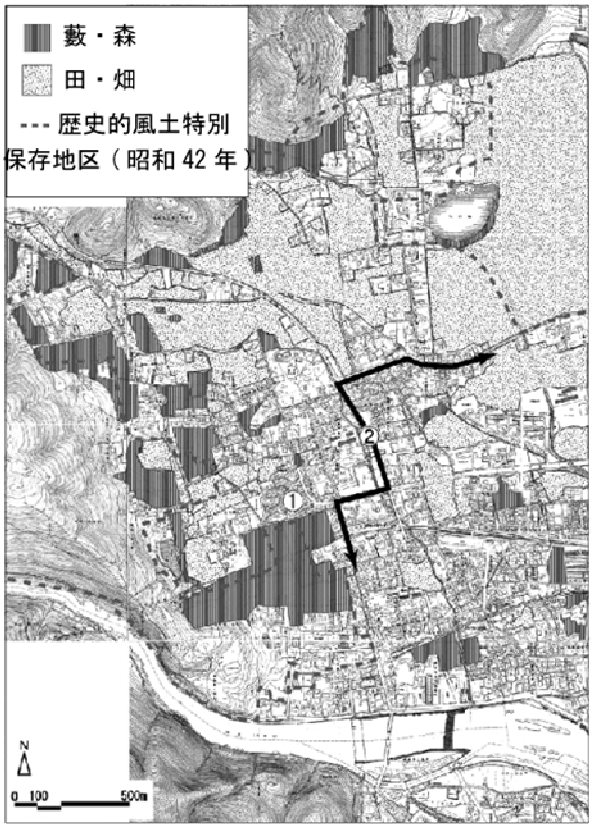
嵯峨の景観，土地利用が変化していくのは明治43年の嵐山電車（四条大宮−嵐山間）が開通してからである．**図−4**にみられるように，京都鉄道の嵯峨駅前に駅前広場と新道が建設され，新道周辺の開発が起こり(**図−4**の①)，駅の北側と西側に民家が建ちはじめている．また，大正11年には旧角倉邸跡を中心に嵐山文化村と称する四十余戸の宅地開発が行われた(同②)．



図−３　明治 27 年頃の嵯峨の土地利用図
明治 27 年発行の仮製地形図をもとに作成
(1/20000, 大日本帝国陸地測量発行部)



図−４　昭和 11 年頃の嵯峨の土地利用図
昭和 11 年発行の都市計画図をもとに作成
(1/3000, 京都市土木局都市計画課)



図−５　昭和 45 年頃の嵯峨の土地利用図
昭和 45 年発行の都市計画図をもとに作成
(1/2500, パシフィック航業会社編)

図−６　平成 9 年頃の嵯峨の土地利用図
平成 9 年発行の都市計画図をもとに作成
(1/2500, 京都市都市計画局)

昭和４年には嵐山から清滝を結ぶ愛宕山鉄道が開業した(③)が，昭和19年に戦時体制下の方針により廃止，そのまま廃線となり嵯峨の景観に大きな影響を与えることはなかった．戦前まではその他土地利用の大きな変化はなく，嵯峨の開発は駅周辺の狭い領域に限られていた．嵯峨の景観，土地利用が大きく変化するのは戦後である．

（４）昭和中期（昭和28年と同45年）までの変化

昭和5年から7年にかけて，嵯峨の山辺の広域にわたり都市計画法に基づく風致地区に指定された(**図−５**)．風致地区の影響に加え，開発が遅れたこともあり，昭和28年までの嵯峨の土地利用の変化は比較的小さく，その景観の多くは維持されてきた．しかし，野宮と落柿舎を結ぶ経路上にあり景観上重要であった藪地を切り開いて，行政が府営・市営住宅を整備した(**図−５**①)ことは大きな反論をよんだ．

昭和31年に風致行政が京都府から市に移管され，京都市では風致地区規則により運用を図った．その後，龍安寺・仁和寺から広沢池を経て嵐山と結ぶ新道の建設によって沿道を中心に宅地開発が行われ，釈迦堂門前の藪や田畑が激減する(**図−５**の②)こととなる．

（５）現代までの変化

戦後の嵯峨には開発の波が押し寄せる．昭和41年に「古都における歴史的風土の保存に関する特別措置法」が制定され，小倉山山麓のごく限られた領域と，北嵯峨の田園地帯が歴史的風土特別保存地区の指定を受けた．その後の昭和45年に円町−嵐山間を結ぶ新丸太町通りが開通し(**図−６**の①)，自動車交通が激増，宅地開発が一層進んだ．さらに宅地開発に伴い駐車場への用途変更が非常に多くみられた．その結果，保存地区の指定を受けた区域と神社仏閣の周辺，そして一部の山裾を除いた多くの領域にわたり自然景観は消失した．

４．嵯峨における景色の持続

（１）風致行政の与えた影響

山辺や野の景色の持続には風致行政が与えた影響が大きい．前節で述べたように戦前に京都府が管理していた風致地区内では景観の変化が少なかった．歴史的風土特別保存地区が指定された昭和42年の直後の同45年から現代に至るまでの藪・森と田・畑の減少した領域をみると，特別保存地区内は現状変更が厳しく制限されたため変化はほぼなかったが，区域外になると大きな変化が生じていることが分かった．

北嵯峨に関しては，広沢池と大沢池の間の領域が歴史的風土特別保存地区に指定されたことによって広大な領域にわたってその景観が持続した．この田園が残ることによって訪問者は嵯峨野の「野」を偲ぶことができた．

（２）観光経路からみた景色

以上のように土地利用の変遷を追ったが，嵯峨の景色の持続という視点で考慮する場合，その景色が訪問者にとってどこから体験されていたのかという点が重要となる．そこで江戸時代における嵯峨巡りの主要な経路を，当時の紀行文集である『史料 京都見聞記』[9]をもとに明らかにし（**図−１**），これと現代の観光経路を比較すると，その多くが重なった．それは，大河内山荘などの新しい名所ができた以外に，名所の位置にはほぼ変化はなく，訪問者はそれらを結ぶように歩いているからである．

嵯峨全体を見渡すと近代化を経て土地利用は大きく変わったが，景色を眺める場所として重要な観光経路である山辺の「みち」や嵯峨野の「野」，名所などの「要所」においては，そこから眺める景色に大きな変化が生じなかった．そのために，訪問者が眺める嵯峨の景色には変化が少なかったといえる．

５．まとめ

本稿では京都西郊の景勝地である嵯峨を対象とし，①森・藪や田・畑などの「図」にも「地」にもなる自然景観に着目し，その景観的効果について述べた．さらに，②近代以降の土地利用の歴史的変遷を，都市計画図を用いて分析し，その際に③風致地区や歴史的風土特別保存地区などの風致行政が景観の持続と変容に与えた影響について考察を行った．以上の分析を通して嵯峨の景色の特徴を分析し，その持続と変容について考察を行ってきた．今後も更に詳細に分析を行っていきたい．

参考文献

１）古橋信孝:平安京の都市生活と郊外, 吉川弘文館, 1998
２）渡辺菊眞，布野修司:「鳥辺野」（京都阿弥陀ヶ峰山麓）の空間的特質に関する考察, 日本建築学会計画形論文集 543号, 2001, p187−194
３）北尾鐐之助:新京都散歩, 創元社, 1940, p63
４）松尾芭蕉著:「嵯峨日記」, 松尾芭蕉集, 小学館, p390−391
５）京都市編:史料京都の歴史 右京区編, 平凡社, 1979, p439
６）ひめまつの会:平安和歌歌枕地名索引, 大宇堂書店, 1972, p276
７）谷崎潤一郎:「朱雀日記」, 悪魔, 1913, p49
８）高桑義生:洛西景観, 高桐書院, 1947, p161
９）駒敏郎, 村井康彦, 森谷尅久編:史料 京都見聞記 1ー3 巻, 法蔵館, 1991−92

[1] 古橋信孝:平安京の都市生活と郊外, 吉川弘文館, 1998
[2] 渡辺菊眞, 布野修司:「鳥辺野」(京都阿弥陀ヶ峰山麓)の空間的特質に関する考察, 日本建築学会計画形論文集 543 号, 2001, p187-194
[3] 北尾鐐之助:新京都散歩, 創元社, 1940, p63
[4] 松尾芭蕉著:「嵯峨日記」, 松尾芭蕉集, 小学館, p390-391
[5] 京都市編:史料 京都の歴史 14 右京区編, 平凡社, 1979, p439
[6] ひめまつの会:平安和歌歌枕地名索引, 大宇堂書店, 1972, p276
[7] 谷崎潤一郎 :「朱雀日記」, 悪魔, 1913, p49
[8] 高桑義生:洛西景観, 高桐書院, 1947, p161
[9] 駒敏郎, 村井康彦, 森谷尅久編:史料 京都見聞記 1ー3 巻, 法藏館, 1991-92